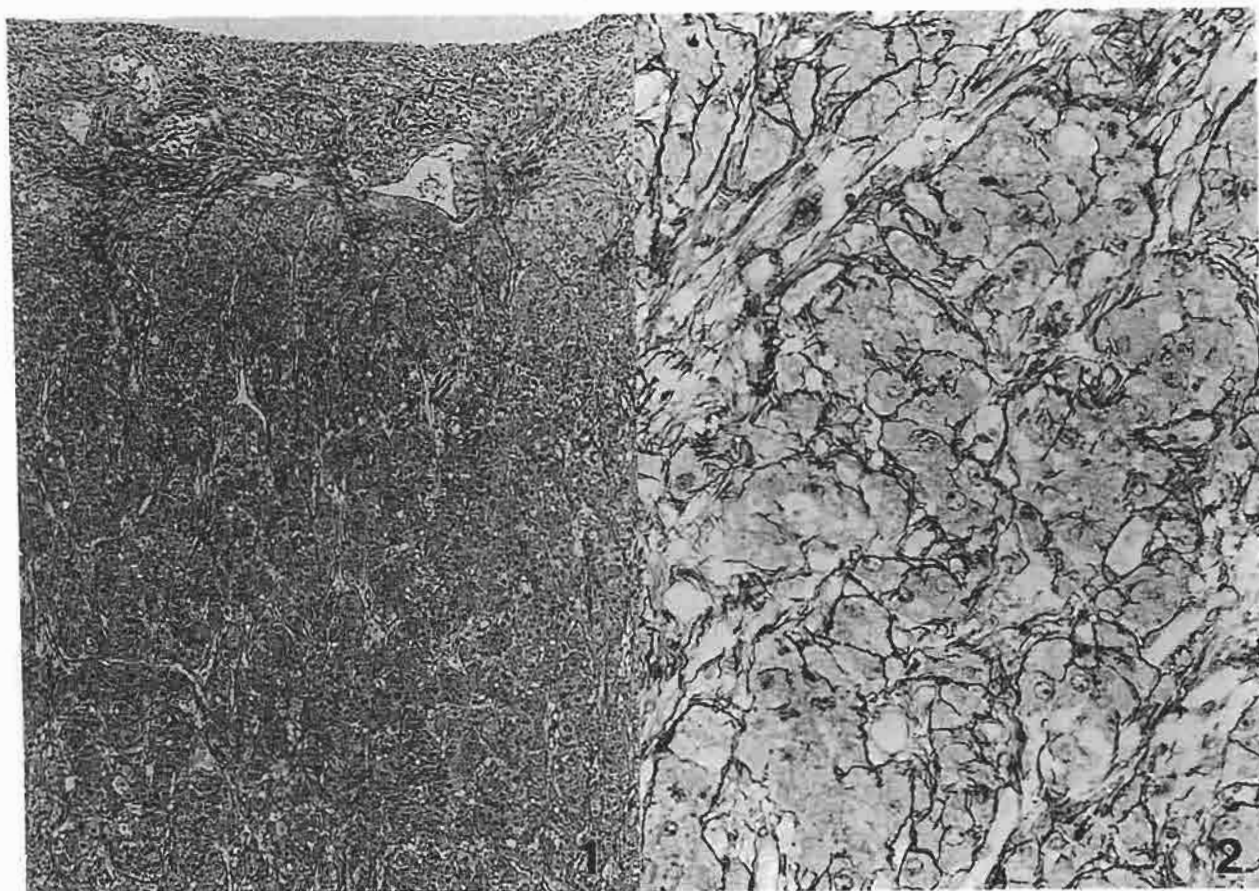


馬の卵巢腫瘍

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題 第34回獣医病理学研修会標本No.625



動物：サラブレッド種，雌，生後14時間。

臨床事項：娩出直後より呼吸速拍を示し，生後1時間より5時間にわたって酸素吸入を行った。生後6時間目には自力での起立が可能となり，呼吸状態もやや改善された。しかしながらその6時間後に再び呼吸速拍を呈し，酸素吸入を再開したが1時間後に斃死した。

剖検所見：骨格筋，横隔膜に褪色巣が散見された。左卵巢辺縁部には茸状を呈する直径5 cmの腫瘍が突出，卵巢も大きかった。剖面において表層部数mmは充実性であったが，中心部に進むに従い水腫性傾向を持つ疎な組織よりなっていた。

組織所見：腫瘍は堅固な結合組織性被膜に覆われていた。被膜下には，クロマチン量は少ない核小体の明瞭な円形核と小空胞を有し，明るい大型細胞質を持つ細胞が副腎皮質索状層を思わせる細胞配列を示していた（写真1）。これらの細胞は腫瘍の中心部に向かうにつれ，その密度は疎となり，数個から十

数個の細胞集団と疎な結合組織による構成を経て，疎な結合組織のみの組織に至っていた。腫瘍を構成する大型細胞はオイルレッドOによる脂肪染色において，分布には差があるものの細胞質に豊富な脂肪滴を有していた。また，渡辺鍍銀法においては腫瘍細胞間に好銀線維が豊富に分布していた（写真2）。なお，卵巢と腫瘍の関係は卵巢皮質が順次腫瘍内に移行していく像が観察された。卵巢髓質には大量の間細胞の増生像が見られた。

考察及び診断：腫瘍における好銀線維の分布状況を含む組織構造及び染色態度より，副腎皮質の異所的発生である「馬の卵巢の副腎皮質細胞結節」は否定された。また増殖細胞の脂質陽性所見から，犬，猫，牛で知られ，猫では2ヵ月齢の幼弱動物にも報告されている性索-間質腫瘍（sex cord-stromal tumor）の脂質細胞腫瘍（lipid cell tumor）と診断した。なお，間細胞過誤腫（interstitial cell hamartoma）ではないかとの付議があった。